

今年度刊行の県史料紹介

黎明館調査史料室では、今年度末に刊行する『鹿児島県史料』の校正作業に取り組んでいます。これまで刊行してきた『鹿児島県史料』は、今回紹介する2冊を加えて104冊を数えます。

以下、今年度刊行予定の『鹿児島県史料』(2冊)を御紹介します。

『旧記雑録拾遺 神社調一』

今年度から刊行が開始される「神社調」は、旧薩摩藩領である薩摩・大隅・日向諸県郡の寺社の由緒・関係文書・歴代住職名等が計40冊にわたって書き上げられたものです。また、ほぼ同様の記載が見られるのが「寺社調」(計18冊。但し、鹿児島部以外の薩摩国及び日向国諸県郡の記載は無し。)で、いずれも東京大学史料編纂所にあります。

上記の二つの史料には近世の寺社に関する内容がかなり詳細な部分まで書かれており、これまでも市町村の郷土史誌や史料集編纂の際に基礎史料として重要視されてきました。これらの正確な成立時期や作られた目的等については不詳とせざるを得ませんが、『鹿児島県の地名』(平凡社、1998年)によれば、史料全体を通して江戸後期の寺社奉行である新納久仰の注記が見られることから、編者は新納とみてよさそうです。

『伊佐市郷土市誌史料集二』(伊佐市郷土史誌編さん委員会、2016年)によると、新納は伊佐郡大口郷の地頭であった新納忠元をはじめ自家の先祖に強い関心を示していて、自身の所蔵文書のみならず大口等の郷士の所蔵文書を借覧書写、表装し返還するなど、古文書・古記録等の調査・蒐集に余念がありませんでした。

幕末期の薩摩藩では、記録所等に命じて寺社領の悉皆調査を行わせていますが、『国分郷土誌 資料編』(国分市、1997年)によれば、おそらく新納がその調査報告や寺社の提出書類を元にして、他の諸史料等も多く引用しつつ、明治初年頃までに集成したものと考えられています。(但し、これは現存しません。)

また、同書によると、明治23(1890)年の田原直助(陶猗)の注記が見られることから、「神社調」「寺社調」の両者ともにその時期以降の写本と推測されています。

刊行最初の巻となる今年度の内容は、旧薩摩藩領内の主な神社の記事を網羅した「府内及各郷(上・中・下)」と鹿児

島城下の寺社関係文書等を掲載した「鹿児島部(一～四)」、現在の鹿児島市吉田・郡山地域及び日置市伊集院地域の寺社に関する記載をまとめた「薩摩国之物一」となります。

『市来四郎史料二』

平成30年度に刊行した『市来四郎史料一』の後を受けて、東京大学史料編纂所蔵の「旧邦秘録」文久二年一～三、文久三年一・二を『市来四郎史料二』として刊行します。

「旧邦秘録」は市来四郎が編集し、島津久光が加筆した編纂物で、文久2(1862)年が7巻3冊、同3年が24巻10冊、元治元(1864)年が32巻10冊、合計63巻23冊から成ります。他に「中稿旧邦秘録」が63巻23冊、「旧邦秘録材料」が188冊あります(すべて東京大学史料編纂所蔵)。

『編輯方書類 全』(東京大学史料編纂所蔵)によれば、「旧邦秘録」は久光が在世中に編修を命じ、その材料は保存している書類中から近衛・大原・三条の諸卿を始め、その他諸侯や各藩有志人等の国事にかかる往復の書翰類2,300余通に取ったとあります。「旧邦秘録」全体では、文化元(1804)年から明治6(1873)年に至るおよそ70年間の事実11,816件、3,500余冊に達し、その内久光・忠義・忠濟父子が自ら添削にかかるものは数百巻に及ぶとあります。

「旧邦秘録索引」によれば、文化元年から明治15(1882)年まで、総計1,065件が取り上げられていますので、「旧邦秘録」は本来的にはもっと多くあったのかもしれませんが。

「市来四郎君自叙伝」(『鹿児島県史料 忠義公史料 第七巻』所収)には、市来が「旧邦秘録」の編集に携わった様子が書かれています。すなわち、明治18(1885)年4月頃から編集が始められ、「旧邦秘録」という書名も久光による命名でした。市来は脱稿するごとに久光・忠義等の校閲を受け、久光等は事実の誤り、文字の遺脱等があれば紙捻りを挿入して示し、市来がこれを訂正しました。それでもなお疑問がある場合は、直接会って質問していたようです。

「旧邦秘録」には随所に、「編者曰」で始まる市来の見解や、久光等による訂正の指示書きが見られます。特に「編者曰」や割書で述べられた市来の意見や解説は、同時代を生きた彼ならではのものが多く見られ、本文を理解する上で役立つ物となっています。

本巻には、文久2年正月年首から同3年4月29日迄の合計11巻分を収めました。この間に起こった坂下門外の変・寺田屋騒動・大原重徳東下・生麦事件・軍制改革・琉球通宝鑄造など重要な出来事が数多く収録されています。

桂久武と五代友厚の関係性について

調査史料室学芸専門員 市村 哲二

はじめに

幕末期に藩の家老として主に国元をまとめる役割を果たした桂久武は、明治4(1871)年の廃藩置県によって誕生した都城県の初代参事に就任した。この時期の桂は、幕末期から引き続き五代友厚と書翰のやり取りをするなど密接な交流をしており、他の史料からも両者の親密な間柄が分かる。

本稿では明治初期における二人の関係性について、特に二つの事例から考察してみたい。

『鹿児島糖商社』願立と士族救済問題

明治5(1872)年4月、桂は県政に関する陳情や同郷の政府要人との意見交換のために鹿児島県参事の大山綱良らと共に上京し、この行程の詳細を日記に書き記した。日記には五代との交流に関する記載が多いが、その中に五代が桂を通じて大山から「鹿児島糖商社」願立に関する依頼を受けたと思われる記載が見られる。当時、鹿児島県では藩政期以来続いていた奄美諸島の黒砂糖専売制を止めて新しく士族の商社を作り、生産から販売まで全ての権限を与えて貧窮士族の救済を図ろうとする動きがあった。元々、この案は桂が西郷隆盛に申し入れたものであるが、大山が桂と連携して商社願立の書付原稿を五代に頼み、大蔵省との折衝に向けた事前準備をしたものと考えられる。(後に「大島商社」として稼働。)

貧窮士族の救済は桂や大山ら旧鹿児島藩域の地方行政担当者にとって、彼らの不満を抑えて反乱などを防止する意味でも非常に重要な問題であった。その一方で、五代は桂に宛てた書翰(推定明治4年12月15日付)の中で、「鹿児島県の御形勢百藩ニ対候而も汗顔ニ不堪」「三百年相後れ候形勢、乍陰茂歎慨ニ堪へ不申」と現況を強く憂い歎く心境を伝えている。

おそらく、海外渡航経験があり開明的な思想の持ち主であった五代にとっては、旧体制側の鹿児島士族を保護する政策に対し複雑な思いがあったのではないだろうか。

元来、五代は若い頃から薩摩独特の剛健な士風に馴染んでいた様子が見受けられ、逆に旧弊を嫌い藩外での活動の場を広げた節が感じられ、西郷ら武断派グループとの接点も見当たらない。また、薩英戦争で英国の捕虜になって以降、彼らからの反感は明治期に五代が維新政府の一員として活躍すると一層増幅されていったようである。(なお、五代は明治2(1869)年に政府を退官し、大阪の産業振興に尽力している。)

しかしその状況下で、五代が西郷派とも言える桂との繋がりを維持し続けたのは、桂の人柄に対する信頼感やその実務能力を高く評価していた事が理由として挙げられよう。また、

桂が五代を産業振興の面でいかに頼りにしていたかは鉦山開発に関する両者の交流などから窺う事が出来る。

山ヶ野金山を主とした鉦山開発

明治4年10月21日付で桂が五代に送った書翰の中には鹿児島県の産業振興に向けた建設的な内容の意見が見られるが、それは先述した商社の設立と山ヶ野金山の活用に関するものであった。山ヶ野金山は現在の霧島市横川町に位置し、寛永17(1640)年に発見された鉦山である。一時は日本屈指の金の含有量を誇り、江戸後期までの約200年間で25トンの金が産出されたが、幕末期には採掘場所も地中深部となり産出量が減少していた。横川は当初都城県の管轄であったため、参事に就任した桂が再開発による増収に向けて強い興味関心をもっていた事が書翰から読み取れる。なお、全国の鉦山は廃藩置県後に国が没収するが、旧鹿児島藩域の鉦山はその対象にされなかった。これは維新政府における倒幕の主体としての鹿児島藩の地位がそうさせたようである。

明治6(1873)年1月15日、都城県・美々津県を廃止して新たに宮崎県を設置する内容の太政官布告が桂の元にもたらされ、都城県はわずか一年余りで廃県となった。それに伴い、桂は豊岡県(現在の兵庫県の一部)権令就任の命令を受けるが、健康上の問題を理由に辞退する。その後、桂は旧家臣団と共に霧島田口の桂内集落開拓に従事する中で、山ヶ野金山を含めた鹿児島・宮崎両県内の鉦山開発に関しては五代とのやり取りを続けた。例えば、明治6年3月30日付の五代宛書翰で桂は鉦山開発を委任したいと述べた上で、その利益を学校教育の費用に還元させてほしいと伝えているが、この内容からは両者の信頼関係の一端が窺える。

おわりに

桂が鉦山開発に拘った理由の一つとして、事業拡大による士族の雇用確保があったと推測される。明治9(1876)年9月26日付の五代宛書翰で桂は、士族の現状や将来を憂いつつ鉦山開発に関する意見を伝えていた。立場は違えども五代は、桂が士族救済を切実な問題として重く捉え続け、苦心していた事を彼なりに理解していた筈である。翌年、桂は西南戦争で西郷ら鹿児島士族たちと共に戦死し、一方の五代は大阪経済の発展に貢献し続けるが、両者の良好な関係性はおそらく最後まで変わらなかったものと思われる。

(主な参考文献)
 「桂家文書」(個人蔵、黎明館保管)
 『西郷隆盛全集 第三巻』(大和書房、1978年)
 『鹿児島県史料集(26)桂久武日記』(鹿児島県立図書館、1986年)
 『鹿児島県史料集(30)桂久武書翰』(鹿児島県立図書館、1990年)
 『横川町郷土誌』(横川町、1991年)
 『宮崎県史 通史編 近・現代1』(宮崎県、2000年)



桂久武写真(個人蔵、黎明館保管)